

編集後記

馬は4歳以上になると成長したと見なされ、牡馬はコルトからホースに、牝馬はフリーからメアに呼び名が変わるそうである。第4回目の発刊を迎えた『メディアと文化』は、馬で言えばホースかメアであるが、果たして成長したかどうか心許ない。しかし院生諸君が、厳しい審査員の注文と審査をパスし、5篇の論文を発表できる運びになったことは、仔馬が着実に成長しているかのように感じられ、喜ばしい。

さて本号には、国際言語文化研究科教育研究プロジェクト「拡がり行くメディア教育研究の地平：産学社会連携によるメディア教育研究の現場から」の研究成果が多数掲載されており、同プロジェクト特集号という性格を帯びている。「左翼ポピュリズムの陥穽」（布施哲）、「A Critical Discourse Analysis of Discourse Strategies in Reports of Youth Crime in UK Radio News」（Edward Haig）、「Activating Wendell Berry's Concept of "Connection" through "Communication"」（Kato Sadamichi）、「Publicly Displayed Maps in Japan As a Cultural Testimony to a Wealthy Lifestyle」（Simon Potter）、「Viewpoints of Intercultural Communication in the Media as Seen through the Researchers Collaborative Work」（Tanaka Kyoko, See Eng Teong, and the Intercultural Communication Research Group）、「ゲーテンベルグとムーアの法則」（水野雅夫）がそれである。同プロジェクト研究成果には、この他に『メディアと文化』第3号に発表された「地上デジタル・データ放送による災害情報配信実験の検証」（磯野正典）も含まれる。

ところで上記プロジェクトの副題は、当初「産学連携・・・」となっていたのであるが、参加者の合意の下に「社会」を加えて、「産学社会連携・・・」に修正した経緯がある。「産業」の視点と「学術研究」の視点に、「社会」の視点を加えて連携・コラボレーションしようという趣旨である。このプロジェクトの参加者は、メディア産業界の人間と大学教員とで占められているが、「社会」の視点を併せ持つプロジェクトであることを明確にするために山形国際ドキュメンタリー映画祭コーディネーターである藤岡朝子氏を招き特別講演会「東アジアのドキュメンタリー映画：個人映像から見える同時代性」を開催した（本誌の記事「イベント4」参照）。「産」「学」いずれの視点からも抜け落ちる何か、無尽のエネルギーを感じさせるイベントであった。本研究科における産学社会連携の、成長には程遠い状況にどっぷり浸かりつつ、「産」も「学」も「社会」の一部にすぎず、人間社会は自然界の一部にすぎないことを、つくづく思う。

(2008.3 KT)